

オプション教材ピラカンサ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

1.

3.

5.

5.

「家」は家族の全体性を意味する。それは家長において代表せられるが、しかし家長をも家長たらしめる全体性であつて、逆に家長の恣意により存在せしめられるのではない。特に「家」の本質的特徴をなすものは、この全体性が歴史的に把握せられているという点である。現在の家族はこの歴史的な「家」を担っているのであり、従つて過去未来にわたる「家」の全体性に対し責任を負わねばならぬ。「家名」は家長をも犠牲にし得る。だから家に属する人は親子夫婦であるのみならずさらに祖先に對する後裔であり後裔に對する祖先である。家族の全体性が個々の成員よりも先であることは、この「家」において最も明白に示されている。(中略)

我々が日本的なる恋愛の特殊性について語ったことは、そのまま家族としての存在の仕方にも通用する。ここでは男女の間ではなくして夫婦の間・親子の間・兄弟の間が問題であるが、この「間」がまず第一に全然距てなき結合を目ざすところのしめやかな情愛である。素朴な古代人は夫婦喧嘩や嫉妬を物語るに際してすでにこのような距てなき家族の情愛を示している。さらに万葉の歌人憶良の「しろがねも黄金も玉もなにせむにまされる宝子にしかめやも」の絶唱は、日本人の心を言い当てたものとして、永く人口に膾炙している。憶良の家族的情愛はかの罷宴の歌においてさらに一層直観的に現われる。「憶良らは今は罷らむ子哭くらむその子の母も吾を待つらむぞ。」このようなしめやかな情愛は大きい社会的変革を引き起こした鎌倉時代の武士にも見ることができ。熊谷蓮生坊の転心は子に對する愛情にもとづくのである。さらに足利時代の謡曲においては、親子の情は最も根源的な深い力として描かれている。徳川時代の文芸が人の涙を絞ろうとする時にこの親子の情を使つたことは言うまでもない。あらゆる時代を通じて日本人は家族的な「間」において利己心を犠牲にすることを目ざしていた。自他不二の理念はこの場面において比類なく実現せられていたのである。従つて第二にそれはしめやかであると同時に激情的になる。情愛のしめやかさは単に陰鬱に沈んだ感情の融合ではなくして、横溢する感情を变化においてひそかに持久させたものである。強い感情が燦し

をかけられて静かな形に現われたものである。だから距てなき結合を目ざす力は表面の静かさにもかかわらずその底力においてきわめて烈しい。利己心の犠牲も、単に便宜上必要な程度に留まるのではなくして、あくまでも徹底的に遂行せられようとする。そこで障礙に逢うごとにしめやかな情愛は激して熱情的になる。それは家の全体性のゆえに個人を屈服し切るほどの強い力を持っている。だから第三に家族的な「間」は生命を惜しまない勇敢な・戦闘的な態度となつて現われてくるのである。曾我物語に現われているような親の仇討ちの思想がいかに強く日本の民衆の血を湧かせたかがそれを示している。親のために、また家名のために、人はその一生を犠牲にする。しかもその犠牲は当人にとつて人生の最も高い意義として感ぜられていたのである。「家名」のために勇敢であつた武士たちは皆そうであつた。家の全体性は常に個人より重いのである。従つて第四に人はきわめて恬淡に己れの命をも捨てた。親のためあるいは子のために生命を賭すること、あるいは「家」のために生命を捨てること、それは我々の歴史において最も著しい現象である。家族のために勇敢であることが必ずしも利己心にもとづかず、従つて執拗に生を欲するのでないということとは、しめやかな情愛がすでに利己心の犠牲をふくむということによつても理解し得られるであろう。

かくして「家」としての日本の人間の存在の仕方は、しめやかな激情・戦闘的な恬淡というごとき日本的な「間柄」を家族的に実現しているにほかならぬ。そうしてまたこの間柄の特殊性がまさに「家」なるものを顕著に發達せしめる根拠ともなっているのである。なぜなら、しめやかな情愛というごときものは、人工的・抽象的な視点の下に人間を見ることを許さず、従つて個人の自覚にもとづくところの、より大きい人間の共同態の形成には不適當だからである。そこで「家」なるものは日本においては共同態のなかの共同態として特に重大な意義を帯びてくる。

(和辻哲郎『風土』)



私たちは日本という風土のなかで暮らしている。そして、日本の風土のなかで暮らしてきた人々の過去の経験を受け継いでいる。日本の農業や林業、漁業の仕方、日本的な建築、日本的な宗教観、祭りなどの行事やさまざまな習慣。私たちの発想や考え方も、この風土から完全に離れてはつくられていない。いわば私たちは、日本の風土を基層文化としてもちながら存在しているのである。

ところが、そんなことは十分に認めているはずの私も、日本という国家に対しては、少し冷静な態度をとりたくなる。というのは、次のような気持ち私が私にはあるからである。

私が上野村に滞在するようになった頃、村人が使う「公共」という言葉に関心をもったことがあった。「それは公共の仕事だから」とか、「それは公共のことだから」というようなかたちで、村人は何度となく「公共」という言葉を使う。ところが村人が使うこの言葉の響きは、それまで私が東京で感じていたものとは少し違っていた。

東京で「公共」といえば、国や自治体が担うもの、つまり行政が担当すべきものを指していた。それに対して私たちは「私」であり、「私人」であった。だが村人が使う「公共」は、それとは違う。「公共」とは、村では、みんなの世界のことであり、「公共の仕事」とは、「みんなでする仕事」のことであった。だから、春になって、冬の間に荒れた道をみんなでおすことは「公共の仕事」であり、山火事の報を受けて家から消火にとび出すことも、祭りの準備をすることも、「公共の仕事」であった。

「公共」と行政とは、村では必ずしも一致していないのである。村人の感覚では、行政の前に「公共」があり、行政は「公共」のある部分を代行することはあっても、それはあくまで代行であって、行政イコール「公共」ではなかった。

そして村人が感じている「公共」の世界とは、それほど広いものではない。それは自分たちが直接かわることのできる世界であり、自分たちが行動することによって責任を負える世界のことであった。つまり、自分との関係がわかる広さといってもよいし、それは、おおよそ、「村」という広さであるといってもよい。

つまり、村人にとっては、社会は、それぞれの地域で展開している「公共」の世界の連合体のようなものとして、とらえられている

た。そして私には、その方が、社会の自然なとらえ方のように思われた。「公共」とは自分たちが共同でつくりだしている世界だととらえる考え方も、行政は公共のある部分を代行しているにせよ、けっして行政イコール公共ではないという見方も、社会とはそれぞれの地域の人々が責任を負っている場所の連合体だといふとらえ方もある。

私には、近代国家はこのような社会観をつき崩してきたように思われる。近代国家は、すべての人々を国民として共通化、平準化しようとしてきた。国民としての画一化をはかったといってもよい。おそらくその理由は、近代国家というものが、ヨーロッパの絶対王制の時代状況下で生まれたからであろう。すなわち度重なる戦争をくり返していたヨーロッパ絶対王制の国家は、戦争に勝利するためには、臣民の国民としての統一と、国家統一のための国民的アイデンティティーの確立、共通意識をもった国民としての画一化が、どうしても必要であった。そしてこの国民としての共通化が、後に市場経済形成にも役立っていた。

この国民国家が、近代化の過程で日本にも移入されてきたのだとするなら、村人の感じている「公共」の世界と国家との間には、ずいぶん大きな隔たりがあることになる。そのどちらに重心を置くことが、自然と人間の未来にとってよいのか。それは私たちが考えてもよい課題である。

注 上野村——群馬県多野郡にある山村。

(内山節『「里」という思想』)



そもそもプラトンが主著ともいべき対話篇『国家』で展開した画家批判以来、伝統的美学は、原像の直接的再現という理念の重圧を、芸術に対してかけてきた。すなわちイデアに即して作られた寢椅子の模写にいそむ画家を念頭に置いたプラトンは、絵画による模倣が、原像からの二重の離反・劣化（寢椅子の絵は、イデアの模倣物たる現実の寢椅子を、さらに模倣したことになる）を引き起こし、直接的な再現という課題達成を、一層不可能なものにしているのだとして、画家の業を寢椅子職人のそれよりも下位に位置づけたのだった。けっして再現されないイデアを再現せねばならぬという重荷は、この後イデアが神の内へ、さらに人間精神の内へとその座を移しても、ずっと荷い継がれていく。ところが、それに対して柳が示そうとしたのは、近づきえない原像への接近という不条理な促しではなく、むしろ「原像からの距離が別な美を生み出していく」という希望である。既に『工芸の道』の柳は、こういつていた——「かりに一人の作者が一つの壺を作り、其上に山水の画を描いたとする。そうしてそれを見本として民衆が何千何万と作り得たとする。既に見本を意識せずして作り得る迄に熟達したとする。其時それは美において、遙か見本よりも美しくなっているであろう」。原像から遠ざかれば遠ざかるほど、かえって「本質的なもの」へと近づいていくという反イデア論的な美は、たとえば柳が染色の領域で強い期待を寄せていた芹沢けい介の仕事などに具体的に現われる。芹沢の型染は、肉筆の下絵に基づく形紙切り出しの段階で、モデルとなった事物の姿を既に二段階単純化させているのだが、さらに形紙による糊付け・色差しと進むにつれてデッサンから離れ、水洗いを経て最終的に布地に定着するに及べば、さまざまな貝殻や互いに寄り添って泳ぐ鯛などが、見事なうちに結晶化して出現してくる。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

工程の重なりを経て原像から遠ざかっていくことは、柳によれば、主体の思惑を削り落としていく過程でもある。柳は紺紺を例にしてこういつている——「そもそも紺を生み出すやっかいな工程は、どうあっても原画の模様を、ずれを生み出さずにはおかぬ。けれどもそのずれがむしろ紺を美しくするのであって、むしろ人為的に揃えてしまえば、紺独特の良さが消えてしまう。さらにそれが実際に使用されて洗いさらされることによって、出来上がり当初なお残っていた人間の臭みも、洗い流されていく。

「個性が間接にされる」と柳がいう反復の根本傾向、すなわち作為の脱色を意味する「間接性」を、柳は版画や大津絵などにも見てとる。それら「工芸的絵画」は、あの「革命の画家」たちが描いた近代絵画のように、個性表現を目指した絵画ではないが、「個性を去る境地にこそ絵画の一天地」がある。たとえば浮世絵の場合、近代的な理解からすれば、絵師の筆による原画が、個性という原像にもっとも近いだろう。けれども「大概の場合段違いに版画になったものの方が美しい。原画の殆ど凡ては版画以上に美しくあることはむしろかしこい」。

柳は反復における私たちの生成を、このように工芸に主軸を置いて考えていた。この態度は、なるほど、それはそれで、ギリシア以来の手仕事への蔑視を基底に潜めた西洋的伝統に対するアンチテーゼではあつただろう。けれども魯山人の視線を通して「手としての人間」をピカソと結びつけてみたように、私は、柳のこうした限定を

乗り越えて考えたいと思う。すなわち柳の思想的可能性を単なるアンチテーゼに留めず、積極的に徹底化する方向で、彼が見た私たちの生成を、造形のより広い視野に見出しうるものと考えたいのである。

（伊藤徹『柳宗悦——手としての人間』）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



一般に「現代の精神的状況における自我の問題」云々という場合、そこにはあるべき「自我」についての了解がすでにあり、それが歪められ、しかも今日では失われているという見地が前提に含まれている。しかしそうして歪みや喪失を、かりにわれわれが日本人とこの社会について倫理的に糾弾してもあまり意味ではないだろう。

なぜならもともと「自我」概念そのものが、すぐれて近代哲学の産物であり、その哲学とはソクラテスや、ルターや、フランス革命などを経てきた西洋の伝統だからである。

またそれだけに、「自我の形骸化」は西洋人にとっては深刻に受けとめられた。「大衆」をキーワードとしたヤスバースの状況判断なども、単に冷徹な時代分析というようなものではなく、あるべき「自我」の喪失への危機感に裏打ちされた切実なものであった。だとすれば、そうした思想伝統を持たない日本人の場合に、「自我」の「喪失」云々を言うことは本来できないはずであろう。

ただ、「自我」概念が輸入された明治期には、本来のあるべき自己に目覚めた理想的な自我という観念は、単なる浪漫主義に尽きるものではなく、それにはそれなりのリアリティーがあった。旧来の封建制度や、その因習から生じるさまざまな抑圧に対する反抗を通じて「自我」が強調されたからである。すなわち、克服されるべき過去の遺物への「反」として強調された。だが、今日のわれわれの社会ではそうした抑圧も因習も多くは姿を消し、形だけが受容された「自我」概念も、それに伴い中身は急速に曖昧かつ稀薄になってきている。そう感じるのには私だけであろうか。

西洋近代の啓蒙思想、科学、民主主義等を受容した後の、とくに戦後の日本で教育されたわれわれは、「自我」を確立すべきだとか、他人も自分と同じようにそれぞれの自我を持っているに違いないと容易に信じてしまう。学校教育の場でも「主体性のある人間」が目標に掲げられる。「自らの意志で考え、行動を選択し、決定す

る」生き方こそ、あるべき「自我」の姿だとされる。そこから自由と責任の表裏一体化が強く示唆される。

だがそうしようとすると、われわれは現実の社会や人間関係のなかでそのつど挫折し、当惑してしまふ。連続的でもなく主体的でもなく合理的でもないような自我たちが一般的なのであり、そしてまた自分もその一人だからである。

そもそも通常の生活では、「自らの意志で考え、行動を選択し、決定する」ような場面は実際のところかなり稀ではないだろうか。多くの選択や決定は周囲の個々の状況のなかで、異なつた要因の複雑なからみあいの結果として生じるからだ。

しかしわれわれは他方では、自我の同一性や主体性を自分にも他人にも要求してやまない。信頼していた人がもし従来の言動を急に變えたと、われわれは多少とも当惑する。喜ぶ人はまずいない。あげくは裏切られたと憤慨するかもしれない。それは、自我は西洋の「実体」概念のように、持続的、同一的なものであるという、ほとんど信仰にも近い前提が、われわれの日常の意識にすでに染み込んでいるからだ。かりに環境や性質がある程度変化しても、人格はいちいち變わらないだろうと予想する。こうして人格の不変は倫理的に賞賛されるべき事柄であるのに対し、人格の変化は倫理的に悪であるかのように非難される。(中略)

そこで、いつそ前提を転換して、むしろ、西洋でいわれるような意味での不変の「自我」など、少なくとも日本人の社会では誰も始めから持っていなかったし、持つと期待してもならない、と考えることはできないだろうか。「主体」的自我という啓蒙の信仰を止めたほうが、われわれは誤解や絶望に陥らず、したがって無用の摩擦や疲労を起さずに済むのではないだろうか。

(酒井潔『自我の哲学史』による)



このような集団に強く組みこまれた個人にとつて、世界とは集団そのものである。集団、または社会、または今此処の世の中、つまり此岸ということになるでしょう。死ぬと、日本人は、此岸から彼岸へ移るのかどうか。必ずしもそうではなくて、彼岸さえも、実は此岸の、具体的には所属集団の、延長と考えられている場合が多い。日本の文化が定義する世界観は、基本的には常に此岸的、日常的現実的であつたし、また今もそうである、といつてよいと思います。小さな村の中に家族が住んでいて、その家族の中で、誰かが死ぬと、死者の魂はどこへ行くか。しばらくの間、どことも定めず、空中に漂っている、という説もあります。たとえば多くの儒者は、それに近いことを考えていたのでしょう。しかし柳田国男によれば、典型的には、村の近くの山の上に行き、そこから村を見まもっている。村はたいいてい、水のある所ですから、山の裾、谷間など、下の方にあつて、山の上からよくみえます。その山の上に魂が、永久に居るわけじゃないけれど、しばらく居る。そして特定の機会に村へ帰つて来ます。いろんな風俗や習慣があるようですが、とにかく適当な機会に帰つて来る。誰でもよく知っている機会は、夏のお盆です。帰つて来るところは、隣村などということは絶対にない、必ず自分の村、しかも自分の家族のところ。つまり生きていた時の集団への所属性は、死んでも変わらない。日本人の集団所属性は死よりも強し。そういうことです。あるいは、死後の世界が集団の延長だといつてもよい。窮極的には、此岸から断絶し、独立した彼岸は、ない。本来の現実、村そのもののしかないわけです。家族、村、此岸、それが唯一の窮極的な現実です。そういう世界観の此岸性は、どういうことを意味するのでしょうか。仏教が入つて来たときには、その大衆への浸透を妨げる。それにもかかわらず、仏教が大衆のなかへ入つてゆけば、仏教そのものが、現世利益・此岸的効用の方へ、変つてゆく。仏教からその彼岸

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

性を奪う変化を「世俗化」とよぶとすれば、徳川時代に仏教の世俗化が徹底します。徳川幕府は仏教寺院を行政制度化して、誰も仏教徒でなければいけないということにした。仏教が政治権力と結び付いた時代は同時に、思想的には仏教の世俗化が徹底した時代だと思ひます。この時代の政治倫理的な価値体系、あるいは文学的・芸術的な表現は、早くも一七世紀から世俗的なものでした。儒教倫理は此岸的です。文学作品や絵画に、仏教的・宗教的「モチーフ」は、はなはだ少ない。その頃、アジアの大部分の地域の文化は——中国の場合にはちよつと難しい問題があるけれども——仏教的です。ヨーロッパでは、教会が魔女狩りをやつていました。日本ではそれが起こる程の排他的で、教条的な宗教体系は、もはや生きていなくなつた。文化自体が世俗化していた、ということになるでしょう。(中略)

個人が集団へ高度に組みこまれている条件のもとでは、個人がその所属集団、具体的には家や村や藩や国家に超越的な権威または価値へ「コミット」することは、困難なはず。あるいは逆に、そういう絶対的な価値がないから、個人が集団の利益に対して自己を主張することができない、つまり高度の組みこまれが維持される、ということもできるでしょう。これは鶏と卵の関係です。どちらが先であるかは別として、とにかく、日本文化の一つの特徴は、先に触れたように、集団に超越する価値が決して支配的にならないということです。明治以後の支配層は天皇を絶対化しようとしてました。しかし天皇はまさに国民という集団の象徴であり、天皇の絶対化は、集団に超越する価値(たとえば儒教の「天」、キリスト教の「神」)の絶対化であるところか、集団そのものの絶対化に他なりません。

(加藤周一「日本社会・文化の基本的特徴」より)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

アイスランドは、中世紀北欧において一時勢力を逞しうした「北人」(Northmen)が、西暦第九世紀頃に発見移住した北海中の一孤島であるが、既に法律生活に馴れた北人が新たにこの無人島に移住して、漸次政治的社會を建設するようになったのであるから、その発見当時の歴史は、吾人に大いなる教訓と興味とを与えるのである。ジェームス・ブライス氏がその著「歴史および法律学の研究」の中に載せている幽霊に対する裁判の話の如きはその一例である。

昔アイスランドの西岸ブレイジフィルス郷のフローザーという処に、トロッドと称する酋長がおつた。或日海上で破船の厄に遭い、同船の部下の者らとともに溺死を遂げた。その後船は海浜へ打上げられたが、溺死者の死骸は終に発見することが出来なかつた。依つて、この酋長の寡婦スリツズと長子キヤルタンとは、その地方の慣習に従つて、近隣の人々を招いて葬宴を催したが、その第一日のことである、日が暮れて暖炉に火を点ずるや否や、トロッドおよびその部下の者が、全身水に濡れたまま忽然と立ち現れ、暖炉の廻わりに着席したので、その室に集つていた客人らは、この幽霊を歓待した。

それは昔から死人が自身の葬宴に列するのは、彼らが大海の女神ラーンの処で幸福なる状態にいることを示すものであると信ぜられていたからである。しかし、これらの黄泉よりの客人らは、一向人々の挨拶に応ずることもなく、ただ黙々として炉辺に坐つていたが、やがて火が消えると忽然として立ち去つてしまつた。

翌晩にもまた彼らは同じ刻限に出現して同じ挙動を演じたが、かかる事は常に連夜の葬宴の際に起つたばかりでなく、それが終つた後までも、やはり毎夜打続いたのであつた。それで終には召使の者どもが恐怖を抱き、誰一人暖炉のある部屋に入ろうとする者がないうになつて、忽ち炊事に差支えるという事になつた。それは火

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

を焚くと直ちにトロッドの一行が出現して、その火を取巻くからである。そこでキヤルタンは毎晩幽霊専用のために、大きな火を別室に焚くこととして、炊事には差支えないようになったが、しかしそれからというもの、家内に不幸が続出して、寡婦スリツズは病床に就き、死人さへ生ずるに至つたので、キヤルタンは大いに困つて、その伯父にあたる有名な法律家スノルリという人に相談し、その助言に依つて、この幽霊に対して訴訟を起すこととした。即ちキヤルタンその他の七人の者が原告となり、トロッドおよびその部下の幽霊に対して家宅侵入および致死の訴訟を提起し、いわゆる戸前裁判所の開廷を請求し、トロッドの一行は不法にも他人の家宅に侵入して、その結果家内に死人病人を生ずるようになったから、戸前裁判所の開廷を乞うて彼らを召換する旨を声高に申し立てた。ここにおいて、裁判官は通常の訴訟と少しも異なることなく、証拠調、弁論などの手続を経て、幽霊どもに一々判決を言い渡したところ、その言渡を受けた者は、一々起立して立去り、その後再び出現しなかつたということである。

この話が荒唐無稽の作り話であることは勿論であるが、これが我国古代の作り話であつたならば、必ず祈禱「まじない」などで怨霊退散という結末であろうのに、結局法律の救済を求めたということになつてゐるのは、頗る面白い。けだし北人は幽霊の葬宴に列するを信ずる如き知識の程度であつたがゆえに、比較的法律思想に富んでおり、殊に烏合の衆が新しき土地に社會を建設する初めに當つては、法律生活の必要、法的秩序の重んずべきことが切に感ぜられるところから、かくの如き作り話も生じたのであらう。そして、古代絶海の孤島における幽霊ですら、なおかくの如く法を重んじ裁判に服従すべきことを知つておつたのに、現今の文明法治國に生活する者にして、動もすれば法を蔑にする者があるのは、この作り話以上の不思議と言わねばならぬ。

(穂積陳重『法窓夜話』〔初版一九三六年〕による)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

フランスの神話学者デュメジルは、「神話をなくした民族は命をなくす」とまで言っている。つまり、神話はその民族を支える基盤なのである。しかし、現代人の視点から見て、神話のような荒唐無稽なことがどうして、といぶかしく思う人もあるかも知れない。太陽が男性か女性かなどと馬鹿げたことを考える必要はない。太陽は灼熱した球体であることは、誰もが知っている事実ではないか、とその人は言うだろう。

古代のギリシャにおいても、太陽が天空に存在する球体であること人々は知っていた。それにもかかわらず、古代ギリシャにおいて、どうして太陽は黄金の四輪馬車に乗った英雄である、などと信じられたのだろう。

神話の発生を理解するためのひとつの考えとして、分析心理学者のC・G・ユングは次のような話を彼の『自伝』中に語っている。彼は東アフリカのエルゴン山中の住民を訪ね、住民の老酋長が、太陽は神様であるかないかという問いに対して、太陽が昇るとき、それが神様だと説明したのに心を打たれる。ユングは、「私は、人間の魂には始源のときから光への憧憬があり、原初の暗闇から脱出しようという抑え難い衝動があったのだということを、理解した」と述べ、続いて、「朝の太陽の生誕は、圧倒的な意味深い体験として、黒人たちの心を打つ。光の来る瞬間が神である。その瞬間が救いを、解放をもたらし。それは瞬間の原体験であって、太陽は神だといつてしまふと、その原体験は失われ、忘れられてしまふ」と指摘している。

太陽は神であるかないか、などと考えるのが現代人の特徴である。そうではなく、ユングが「光の来る瞬間が神である」と表現しているように、その瞬間の体験そのものを、「神」と呼ぶのである。あるいは、そのような原体験を他人に伝えるとき、それは「物語」によって、たとえば、黄金の馬車に乗った英雄の登場とし

てしか伝えられないのであり、そのような物語が神話と呼ばれるのである。

神話の意味について、哲学者の中村雄二郎は、「科学の知」に対する「神話の知」の必要性としての確に論じている。「科学の知」の有用性を現代人はよく知っている。それによって、便利で快適な生活を享受している。しかし、われわれは科学の知によって、この世のどこ、自分のことすべてを理解できるわけではない。「いったい私とは何か。私はどこから来てどこへ行くのか」というような根源的な問いに対して科学は答えてくれるものではない。

中村雄二郎は、「科学の知は、その方向を歩めば歩むほど対象もそれ自身も細分化していつて、対象と私たちとを有機的に結びつけるイメージ的な全体性が対象から失われ、したがって、対象への働きかけもいきおい部分的なものにならざるをえない」と述べ、科学の知の特性を明らかにし、それに対して、「神話の知の基礎にあるのは、私たちをとりまく物事とそれから構成されている世界とを宇宙論的に濃密な意味をもったものとしてとらえたいという根源的な欲求」であると指摘している。科学の知のみに頼るとき、人間は周囲から切り離され、まったくの孤独に陥るのである。科学の「切り離す」力は実に強い。

「物語」はいろいろな面で「つなぐ」はたらきをもっている。一本の木は科学的に見る限り、細かい事実は明らかにしても、あくまで一本の木である。人間はそれを「使用」したり「利用」したりはできるが、それと心がつながることはない。ところが、その木は「おいじいさんが還暦の記念に植えた木ですよ」という「物語」によって、俄然そこに親しみが湧いてくる。あるいは、木を介して祖父の思い出が浮かんできて、祖父との心のつながりを感じるかもしれない。いずれにしろ、そこに情緒的な関係が生じるのである。

(河合隼雄著『神話と日本人の心』)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

何について、責任が問題となるのか？ まず何よりも、行為に
 して、である。しかも、みずから何かを行うという行為だけでなく、
 何事かをしていないという無為も、また他人が何かをするのを助ける・や
 めさせる行為をもふくめ、まずは行為に堪してこそ、責任が問題と
 なる。

もちろん、行為・無為に堪して「他のようにはできなかった？」
 と問われるとき、その問は、その人の心理的・人格的な特性や、その
 ときの思考・感情にまで及ぶ。しかし、繰り返し返せば、そうした事柄に
 まで責任の問題が及ぶのは、行為のありようが問われるからである。
 そのかぎりでは、まずもって行為に焦点を合わせるのは不当なことでは
 ない。

では、誰が責任を負うのか？「行為した個人が」という答は、自明
 のようにも思える。しかし事態は、つねにそう単純であるとはかぎら
 ない。なるほど、行為するのは、個人である。少なくとも行為は、意
 味を帯びた身体のあるまいにおいて遂行されるかぎり、身体なき存在
 は、行為できない。しかし、だからと言って、行為の責任を負うの
 は、当の個人にかぎられる、ということにはならない。

このことが如実に問題となるのは、会社や国家といった組織が「集
 合的な行為」を遂行するばあいである。しかし、会社や国家は、個人
 が行為するのと同じ仕方では、行為するのではない。ここでは、もっぱ
 ら個人に焦点を合わせて、行為の責任を考えてみたい。

個人が行為するときには、何の前提もなしに、本人にもわけ（理
 由）も分からぬまま、体が動くのではない。その人は、その人なりに
 状況を認知し、自分の欲求や、まわりからの期待や、自分の願望に
 もとづいて決断し、意図的に体を動かして、行為している。何気ない
 ささいな行為においてさえ、状況の認知・周囲の人たちの

抱いている予期・期待、当人の中長期の計画などなど、多くのことが
 前提となっている。

もし、状況認知・周囲からの期待・本人の計画といった行為の前
 提のいっさいが、その個人に由来し、その人によって自由に制御でき
 るのであれば、そのばあいには、行為にかかわる責任は、すべてその
 人にある、ということになる。しかし、実際には、そうではない。
 状況認知・期待・欲求などといった行為の前提の多くは、まわ
 りの人たちとの関係によって生じている。したがって、誤った情報を
 与えられたまま、あるいは過剰な期待を負わされたまま、その人が決
 断したときには、「本人がそう選択したのだから、彼・彼女に全責任
 がある」とは言えない。そう決めつけるのは、実態とずれており、ば
 あいによつては苛酷である。

もちろん、だからといって、「本人が編み込まれていた関係が悪
 かった、環境が悪かった」といった責任転嫁が、つねに正当化され
 るわけではない。催眠術にかけられていたとか、舞蹈病で体が勝手に
 動いたとでもいうのでないかぎり、私たちは、自分が行為した理由
 （わけ）を問われる。思わず、あるいは何気なく行為してしまつて、
 自分でも理由を説明できないとしても、舞蹈病で体が勝手に動いてし
 まったのでもないかぎり、私たちは、自分の行為に責任を負ってい
 る。しかし、もし誤った情報を与えられて、あるいは過大な期待を負
 わされて、あるいは脅迫されて、そう行為することを選んだのであ
 れば、誤った情報を与えた者、過大な期待を負わせたり脅迫した者
 にも、その責任があるはずである。

（大庭健『「責任」ってなに？』による。一部改変）



岩淵悦太郎さんの調査によりますと、一〇〇〇の単語を覚えると、英語では八〇%理解でき、フランス語では八三%分かる。それなのに、日本語では六〇%しか分からない。つまり、日本語は語彙が多いので、一〇〇〇語くらい覚えたのでは、六割しか理解できないのです。日本語の語彙は、ともかく豊かです。

でも、その反面、こんな問題も起きてきます。たとえば、漢語を造りすぎて同音異義語がたくさん出来てしまったのです。耳で聞いただけでは分からないことが多い。

「こうえん」と聞くと、あなたはどんな漢字を思い浮かべますか？ たちどころに、「講演」「公演」「口演」「好演」「後援」「公園」「高遠」など数種類の同音異義語を思い浮かべたに違いありません。文脈によって、どの「こうえん」に分かることもありますが、特定できないこともあります。

「先生は日曜日にはコウエンに出かける」と言われると、先生と呼ばれる人はさまざまなジャンルにいますから、「講演」「公演」「口演」「公園」の四種類が候補になってしまいます。

これからの社会は、あらゆる人がメディアを通じて話し言葉で説明していく機会が増えていく時代です。話した言葉を機械に聞き取らせて、そのまま書物にすることも増えてきています。話し言葉が主役になる時代の到来を考えると、同音異義語の整理は急務です。

また、近年増えつつけている外来語をどうするかという問題もあります。最近、国立国語研究所が、こんな発表をしました。一九五六年には、外来語が日本語に占める割合は、一割未満であったのに、一九四年には、外来語が日本語の三割強を占めるにいたったというのです。外国語をカタカナ書きしただけで、外来語になりきっていないものも多いので、カタカナ語と呼ぶこともあります。つまり、カタカナ語の氾濫です。

一〇数年前といえ、国際化、グローバル化が叫ばれていた頃です。インターネットの普及も目覚しく、カタカナ語は増加の一途を辿っています。明治時代の新漢語ブームで、漢語が著しく増えたのに似ています。そして、意味も分からずに新しさゆえに使ってみるという傾向も似ています。ころみに、次に七つのカタカナ語をあ

げてみます。いくつ意味がしつかりと把握できたでしょうか。

アイデンティティー イノベーション エンパワメント
サーベイランス ボーダーレス モラルハザード レシピ
エント

どれも聞いたことはあります。でも、意味が正確にとらえられているかと言われると、おぼつかない。こうした状況に危機感を抱えた国立国語研究所は、意味の分かる従来語での「言い換え案」を提案しています。それによりますと、順次、「自己認識」「技術革新」「能力開化」「調査監視」「脱境界」「倫理崩壊」「移植患者」となります。たしかに、カタカナ語よりはるかに意味が分かります。

さて、これらのカタカナ語の扱いをどうしたらいいのでしょうか？ 分かりやすさの点から言えば、従来語で言い換えた方が数段優れています。でも、問題があるのです。言い換え案をみてください。ほとんど漢語です。ただでさえ多い漢語をふたたび増やし、同音異義語の問題を大きくしてしまうのはどうでしょうか。耳で聞いただけではよく理解しなければならぬ場面が増えていく社会になることを考えると、問題なのです。

カタカナ語のままにしておいて、意味の定着を待つという方法は、いかがでしょうか。意味の定着に、言い換え案は効力を発揮します。ははん、レシピエントというのは、「移植患者」のことなどと、共通理解を促進してくれます。

明治時代の西洋語を漢語に翻訳して受け入れていったのは、中国文の浸透していた時代にマッチした方法でした。でも、現在多くの日本人に浸透しているのはアメリカ文化です。もはや、漢語の翻訳が力を失いつつある時代なのです。だとすると、カタカナ語のまま、意味の定着するのを待って使っていくという方法も、意外に良いと思えます。

(山口仲美氏の文章に基づく)



氏の『沈黙』は、キリシタン禁制時代の日本に、ポルトガルから二人の若い司祭が潜入を企てるところから始まる。島原の乱が鎮圧されたところである。かれらは苦心惨憺のすえ、取り締りの目をかいくぐって上陸し、日本人信徒との連絡をつける。が、まもなく捕えられ、苛酷な拷問のすえ棄教に追いこまれていく。

その主人公の一人がロドリゴで、踏絵を踏むよう役人に説得される。外国の司祭が転べば、信徒たちも転ぶからだ。転ぶべきか、それを拒否すべきか、思い惑い苦しみつづけるかれの心の奥に、「神よ、あなたはなぜ黙っているのです」という黒い渦のような言葉が噴きあげてくる。救いの手をさしのべてくれない神への呪いの叫びだ。

そのとき、二〇年前にすでに転んでいた先輩司祭のフェレイラがかれの前にあらわれて、いう。――お前の目の前にいるのは布教に敗北した老宣教師の姿だ。知ったことはただ、この国にはお前や私たちの宗教は根を下ろさぬということだけだ。この国は沼地だ。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐り始める……。

それをきいて怒りの声をあげるロドリゴに、今は沢野忠庵という日本名をもつフェレイラは淡々と話をつづける。

「この国の者たちがあの頃信じたものは我々の神ではない。彼等の神々だった。それを私たちは長い長い間知らず、日本人が基督教徒になったと思いきんでいた。……聖ザビエル師が教えられたデウスという言葉も日本人たちは勝手に大目とよぶ信仰に変えていたのだ。……基督教の神は日本人の心情のなかで、いつか神としての実体を失っていった。……日本人は人間とは全く隔絶した神を考える能力をもっていない。……日本人は人間を美化したり拡張したものを神とよぶ。人間と同じ存在をもつものを神とよぶ。だがそれは教会の神ではない。」

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

このフェレイラの言葉は作者の遠藤さんの気持でもあったのだろう。

やがて、そのロドリゴの前に踏絵が置かれるときがくる。細い腕をひろげ、茨の冠をかぶったキリストの醜い顔がそこにあった。

さあ、勇気をだして。踏めば、あの信者たちも助かる、とフェレイラがいう。ロドリゴは足を上げた。するとそのとき、あの人がかれに向かつていった。

「踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ」

キリストはついに沈黙を破ったのである。痛みと苦しみを分かち合うキリストが蘇り、踏むがいいという。そのキリストの背後に、あの厳格な怒れる神の姿はもはやない。慈愛の眼差しを注ぐ母のような許しの神の影が宿っている。

神の愛というより、むしろ仏の慈悲の輝きが立ち昇ってくるような錯覚さえおぼえる。ロドリゴは、人間とは隔絶しているはずの神のイメージの上に、母親のような人間の面影を追い求めているようにさえみえるのである。このロドリゴの変貌はまた、沼地のような日本の宗教風土に生まれ育った作者の、その深い心の底を映しだす鏡でもあるのではないだろうか。

（山折哲雄『近代日本人の美意識』による。文章を一部改変した。）



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

フランス大革命のあと、政治は宗教とははつきりと独立したものと
なってくる。今や国民国家からの給与によって生活するようになった
大部分の科学者たちは、教会に義理立てする必要もなくなったし、
異端として迫害される心配もなくなった。もちろん科学は自然につい
ての研究であり、政治により特定の研究が禁止されるといふ恐れもな
かった。彼らの目的はより立派な研究をするだけとなった。立派な研
究をすれば、科学者としての地位と名誉が約束される。

問題は、何をもちて立派というかである。どんなに面白そうなもの
でも、追試ができないようなものはダメである。公共性が確保できな
いからである。この公共性の確保ならびにそのための方法は、科学に
とつて極めて重要であり、それゆえにこそ、科学は世界規模の普遍装
置として機能するようになるのだが、それはもう少し後の話である。

追試ができてしかも世界初の技術でさらに膨大な富を生み出すも
の。技術ということに限れば、立派とはかくのごときものをいう。し
かし、制度化された科学ではそれだけではすまなくなってきたのであ
る。それは理論が重視されるようになったからである。新しい事実の
発見と並んで、新しい理論を提唱することに大きな価値が置かれるよ
うになった。理論とは切れ切れの現象を単一の体系の下でまとめる
鋭意である。従つてなるべく少ない原理でなるべく沢山の現象を説明
できるほどよい理論ということになる。

錬金術のようなオカルトが、理論と技術を結びつけようとする指
向を有していたことを想い出してほしい。オカルトの嫡子としての科
学もまた、技術や実験結果を、ある理論体系の下で説明したいとの強
い欲求を持つ。それはある意味では、伝統的な大学の知識集団から、
一段低く見られていた新興の科学者たちの劣等感の裏返しという面も
持っていたらう。技術や実験結果を理論で武装することができれば、
理論（知識）しかない伝統的な大学の知識層よりも優位に立つことが
できる。理論化をより強く指向した理学が工学よりも早く、伝統的な
大学の学部として受け入れられたのはゆえなしとしないのである。

さて、科学にとつて、理論の公共性とは何か。それは理論から極
力、個人の特殊性を抜くということに尽きる。それは主観を排し、客
観を重視するということだ。科学は客観というやり方で公共性を担保
したのである。現在の我々から見ると、これはごく当たり前のよう
に見えるが、歴史的に見れば、このようなやり方で公共性を担保したの
は、十九世紀の制度化された科学をもつて嚆矢とする。

宗教は集団による信憑という形でしか公共性を担保できない。文
化や伝統は習慣という形でしか公共性を担保できない。政治は権力に
よる強制か国民による信任という形でしか公共性を担保できない。ひ
と科学だけが、人間の想念や願望や恐れや思い込みから自由な、客
観という基準により公共性を担保したのである。

十六、七世紀の第一の科学革命の時の研究でも、もちろん、現在の
我々から見ても、どの研究が客観的に正しく、どの研究が間違っている
かを判断することはできる。しかし、判断基準となる客観は当時の科
学者集団（本当はオカルト集団）によつて前提とされていたわけでは
ない。それに対し、十九世紀に制度化されて以後の科学者集団は、客
観の重要性を前提としているのである。

科学における客観は十七世紀のデカルトから発した、ということに
なっている。デカルトは心身二元論者ではなく、実は一元論者だった
という説もあるが、公式的には心身二元論（物心二元論）の確立者で
ある。物は身体も含め延長（デカルト的な意味での「延長」とは、空
間の一部分を占有していることをいう）を本質とし、心は非延長的
な思考を本質とするから、この二つは異質なものである、デカルトは
考えた。

このようにして、物と心を分けておけば、物の存在は心の存在に左
右されることはない。物、すなわち客観は延長を持たない神や靈魂や
個々の主観とは独立に存在するという話になる。心や主観が入れば、
事情は個々人によつて違ってくるが、主観が入らなければ、事情はす
べての人にとつて同じである。ここに客観という公共性が出現する。

（池田清彦『科学とオカルト』より）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

本当のことを言えば、客観が主観と独立だなんてことはない。もちろん、自然は我々人間の存在を抜きにしても存在することは間違いない。だから、自然そのものを客観であると考えるれば、客観は我々の存在と独立に存在する。しかし、そんな客観では、いかなる公共性も持ち得ない。なぜならば、公共性を持つためには他人に伝達する必要がある、伝達するためにはとりあえず記述する必要があるからだ。記述するのは、個々の主観である。だから、公共性を持った客観が主観から独立しているということはあり得ないのだ。

科学論文にはありのままの事実が書いてあると思っている人が多いけれども、実はここにあるのは事実ではなく記述である。たとえば、科学者がある実験をしたとする。ありのままの事実であるならば、実験をビデオに撮ってみんなに見せればよい。しかし、そんなものは科学者仲間から決して業績とは認められないだろう。科学論文と認められるためには、実験から有意味であると科学者仲間が認めるものを選びとって記述しなければならぬのである。だから科学における客観的記述と称するものは事実そのものではない。

客観というのは、ゆえに、事実から記述をなす時の、科学者仲間の約束ごとに支えられて成立しているものであり、この約束ごとは後にパラダイムという名で呼ばれるようになるのだが、そういうことは無関係に、今でも、ほとんどの科学者は、記述は約束ごとではなく、事実であるゆえに客観的だと信じているらしいのだ。

先に、科学が歴史上初めて、客観というやり方で公共性を担保した制度だと書いたけれども、この公共性も、実は法律と同じような単なる約束ごとであったわけだ。(中略)

さて、このようにして記述する自分を棚あげしてしまえば、自然の中にはだれが記述しても同一のものがある、とのデカルト的信念は確固たるものとなる。たとえば、目の前の物体が、きれいだるか気持ち悪いかが、いかがわしいか、といった記述は、記述する人の主観によつて違う。しかし、重さが何グラムであるとか、長さが何メートルであるとかは、記述する人の主観によつて左右されることはない。これぞ、客観であるというわけだ。

何でもよいから、測定して数量化すれば科学的データになるとの信仰はここからくる。逆に言えば、数量化できにくい現象は、科学的になりにくいのだ。たとえば、明るいか暗いかの記述は、科学的な記述とはみなされないが、照度何ルクスと書けば、たちまち科学的データになるわけだ。

物理学が十九世紀から二十世紀の半ばにかけて、科学の最先端を走っているように見えたのは、ゆえなことではないのだ。物理学は最も数量化しやすい分野だからである。

もう一つ、数値と並んでだれが記述しても同じものがある。それは、自然の中に存在する不変の実体である。もし、そういうものがあつて、それに名前をつけることができれば、名前(記述)はだれにとつても同じものを指示するに違いない。数値は不変といつても抽象的なものであるが、実体は具体的な物である。客観を重視した科学は、自然の中にある不変の実体を探す試みという面を強く持つようになる。これは素粒子論におけるクォーク(陽子や中性子の構成要素)や超ひも(すべての物質の究極の構成要素として仮想されている最終実体)に続く道となる。

さて、以上述べてきたような、客観的なものによつて理論を構築すれば、理論そのものが客観的になるのは論をまたない。このようにして、科学の理論はそこから「神」や「霊魂」や「主観」を抜いて公共性を獲得したのだ。客観的な理論は、原則的にはだれにも理解でき、その正否が何らかの実験によつて、確かめられるものとなったのである。もちろん理論には内部矛盾があつてはならず理論的整合的であることが求められる。

(池田清彦『科学とオカルト』より)



読解問題 7月4週分

問1 読解マラソン集1番「『家』は家族の全体性を」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本人にとって、「家」という考えの中に、祖先は含まれていない

B 日本人にとって、家名は家長よりも重い存在である

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「『家』は家族の全体性を」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本では、「家」として存在する人間が、個人の自覚を生み出した

B 日本では、個人の自覚に基づく共同態は生まれにくい

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「私たちは日本という風土の中で」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 村人たちが使う「公共」という言葉には、行政のものというニュアンスはなかった

B 村人たちの言う「公共」は、村の範囲を超えたものではなかった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「私たちは日本という風土の中で」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 近代国家は、戦争に勝利するために、国民という共通意識を必要とした

B 村人たちの感じている「公共」という意識が、国民国家の基盤となった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「そもそもプラトンが」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A プラトンは、絵画は模倣ではなく創造であるべきだと説いた

B 柳は、原像から遠ざかることが原像に近づく方法であると考えた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「そもそもプラトンが」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 工芸品は、実生活に使用されることによって、工芸品の作者の個性を明らかにする

B 版画の美しさは、原画の個性を生かすところにある

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「一般に『現代の精神的状況における』」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 自我という概念は、ヨーロッパで生まれたが、既に世界の普遍的な概念になっている

B 日本人にとって、「自我の喪失」は、西洋よりも顕著に現れた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「一般に『現代の精神的状況における』」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 明治期の自我という観念は、封建的社会との対立という点でリアリティがあった

B 通常の生活で、自我を自覚して行動するような機会は少ない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 8月4週分

問1 読解マラソン集5番「このような集団に」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本の文化においては、彼岸は此岸と断絶していなかった

B 仏教は、キリスト教に比べると、より世俗的だった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「このような集団に」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本では、個人が集団を超越した価値を持つことは困難であった

B 天皇の絶対化は、集団を超越した価値の絶対化ではなかった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「アイスランドは、中世紀北欧において」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 昔のアイスランドでは、死人が自分の葬宴に参加することは自然なことと考えられていた

B トロッドの一行が毎晩出現したのは、人々が挨拶をしなかったからである

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「アイスランドは、中世紀北欧において」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A トロッドと部下の幽霊たちは、裁判所には出廷しなかった

B 裁判で判決が出されたことによって、トロッドと部下の幽霊たちは二度と出現しなくなった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「フランスの神話学者デュメジルは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 古代のギリシア人は、太陽が球体ではなく、黄金の四輪馬車に乗った英雄だと信じていた

B 東アフリカのエルゴン山中の老酋長は、太陽は神様だと思っていた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「フランスの神話学者デュメジルは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「科学の知」とは、宇宙の根源的な意味を知ろうとする知である

B 一本の木も、科学的に見れば、さまざまな情緒的關係が明らかになる

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「何について、責任が」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 責任が問題となるのは、動機に対してではなく、行為に対してである

B 行為する本人は、状況の認知などの前提にも責任を負っている

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「何について、責任が」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 行為した本人に誤った情報を与えた者にも責任がある

B 行為した理由を説明できないような行為については、責任を問うことはできない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 9月4週分

問1 読解マラソン集9番「岩淵悦太郎さんの調査によりますと」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本語は、他の国の言葉に比べて文法が複雑なので、外国人には理解しにくい
B これからは、日本語も国際化するので、わかりにくい同音異義語を整理しておく必要がある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「岩淵悦太郎さんの調査によりますと」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A カタカナ語を従来語で言い換えると、耳で聞いたときにかえってわかりにくくなることもある
B 明治時代に、西洋語を従来語で翻訳したように、現代にふさわしい従来語の翻訳を考える必要がある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「氏の『沈黙』は、キリシタン禁制時代の日本に」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ロドリゴが踏絵を踏めば、多くの信徒たちも転向するはずだった
B フェレイラは、日本人が神とよんでいるものは、教会の神とは違うと思った
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「氏の『沈黙』は、キリシタン禁制時代の日本に」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 十字架上のキリストは、自分が踏まれることによって信徒たちを救えるのだと思っていた
B 遠藤周作のえがくキリストや神は、西洋の文化の中にある厳格さを持っていない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「フランス大革命のあと」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A フランス大革命の前まで、科学者は教会に義理立てをしていた
B さまざまな現象をできるだけ新しい理論で説明することが科学に求められている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「フランス大革命のあと」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 理論の公共性によって、科学は社会に役立つものとなることができた
B 科学とは本来、客観を基準にすることで公共性を担保するものである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「本当のことを言えば」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 公共性を持つための客観は、個人の主観から独立している
B 実験をそのままビデオに撮ったものは、公共性のある客観とは言えない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「本当のことを言えば」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 現代では、数量化できない現象は、客観的な科学とは見なされない
B 科学の理論は、「神」や「靈魂」も、その客観的な枠組みの中に取り込んだ
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×